The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イリュミナションの初期作品の問題
Author(s)	泉, 敏夫
Citation	Gallia. 1969, 9, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3703
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

イリュミナションの初期作品の問題

泉　　敏　夫

Illuminations の制作年代については諸説があり，それを決定することは事実むつかしい．しかしわれわれは先ず初期の作品の制作年代の決定をはかりたい．本稿はこの目的に近づくための一試論である．われわれは先ず Rimbaud の生活につき，1872年秋より 1873年春までの期間と，1873年秋より1874年春までの期間について考察し，つぎにこれら２つの期間のいずれに *Illuminations* 制作の可能性と必然性があったかをきわめ，最後に *Illuminations* の初期の作品をもとめたい．このために次の問題点について検討する．

a. Ill.（以後 *Illuminations* を Ill. と記す）が S. E.（以後 *Une Saison en enfer* を S. E. と記す）執筆以前に制作されたと見做す場合，次の問題が生ずる．*Délires* II に D.V.（*Derniers Vers* のこと）が引用されているにも拘らず，何故 Ill. の散文詩が一篇も引用されなかったのか．

b. D. V. と S. E. に出現しないで，Ill. において新しくあらわれた Rimbaud の意識と詩法を考察し，それと D. V. および S. E. におけるものと比較することによる Ill. の位置づけ．

c. D. V. と S. E. における本質的で支配的な意識と感情が，Ill. では如何にあらわれているかを考察し，後者が S. E. 時代の前後いずれに位置づけられるのが妥当か．最後に，かかる意識・感情，およびその表現の，Ill. 自体における変化を考察することにより，初期作品をえらび出す．

1

さて1872年９月７日 Douvres に向って，Rimbaud と Verlaine は出帆し，

ロンドンでの生活がはじまるが，この都市での彼らの生活は悲惨であった．その上彼らがしばしば訪れたコミューンの亡命者たちの住む Soho quarter での窮乏の生活を見て，Rimbaud は不幸に対する意識がますます深くなっていった．しかも10月２日 Verlaine の妻 Mathilde の弁護士が離婚請求の手続をしたが，その６箇条からなる請求理由の若干は Rimbaud に帰せられていた．この事情はまもなくロンドンの２人に伝わった．Verlaine の悩みがふかまると同時に，Rimbaud にとっては，社会的に不利な立場に追いこまれるわけである．Rimbaud の母は Mathilde に会って離婚を諦めさせようとするが，勿論失敗する．11月下旬に，母は Rimbaud に，事件の渦中にまきこまれないため，Charleville へ帰るように，帰国旅費為替付の手紙で命ずる．結局再度の母からの要請でロンドンを去る．12月下旬のことである．明けて1873年１月10日頃ロンドンにひとり残された Verlaine は失意と病いに襲われ，Rimbaud に助けを求める．Rimbaud は直ちに Verlaine の母より50フランの送金を得てロンドンへ戻る．１月17日の Verlaine の Blémont 宛の手紙には，Rimbaud の再会に欣喜した様子が記されている．１月の２人の生活については，１月末の Verlaine の手紙によってある程度示されている．「毎日われわれは郊外と田舎をおどろくべきほど歩き回っている．Kew とか Woolwich などだ．なぜならロンドン市内はずっと以前から知りつくされている... 今夏は多分われわれは Brighton や，またおそらく Ecosse, Irlande へゆくだろう．」と．Kew はロンドン西近郊にあり，Woolwich は同じく東にある．この頃彼らはそれより以上は足をのばさなかったのであろう．さらにこの手紙は，夏になれば南に（Brighton はイギリス海峡に面した都市），また北方へ長途の旅にでかける計画があることを示している．

因に Chadwick は，２月17日より３月25日までの間に北へ旅行したらしいとのべる[1]．何故なら *Promontoire* にあらわれる Scarborough はかなり実景に即して描かれているので，上記の期間この湯治場に長い滞在をしたに違いないというわけである．そして Chadwick はこの散文詩を1873年の春の制作とする．しかしわれわれは

上掲の手紙に示されているように2人の計画は夏に北へ旅をすることであったし，未だ旅に適さない初春にゆく筈はないと考える．南の Brighton ですら夏にゆく予定であるのに，ロンドンの北方 380km の Scarborough へ出発したことは考えられない．従って *Promontoire* は1873年の作ではないと考えたい．

2月17日の Verlaine の Blémont 宛の手紙では「われわれはせい一杯英語を学んでいる.」とのべ，この頃の2人の生活の片鱗を示している．Rimbaud の1月と2月の健康状態は，Isabelle の証言によれば「アルコールやアシィシュの痛飲のために興奮・倦怠・癇癖・痩身・幻想・幻覚の状態を示していた」[2] ということである．発熱と胃の激痛にもおそわれたらしい．このような身体の悪条件の中で，彼の Verlaine に対する純粋な意図が，友の家庭の崩壊をもたらし，あまつさえ裁判事件にまで発展せしめ，自己の社会的地位を悪化させるにいたっては，現実と始源の純潔を望む理想とのへだたりはますます大きくなり，それまでの自己の精神と生活について根本的な検討をせまられていたと考えられる．この徴候は，1872年の末，Rimbaud の名誉のため，離婚問題の解決のために Verlaine と別れるべきだとの母の意見に屈して Charleville へ帰った事実にあらわれていると推定できる．さて3月中には，Verlaine は，妻に離婚を思止まらすためにパリへゆくべきかどうかを迷っていた．Rimbaud は迷いと苦悩にある友を知っていたが，3月25日 British Museum の閲覧カードに Rimbaud の名が記されていることから，その頃は仕事をしていたことがわかる．恐らく *Livre nègre* の構想をこの頃から具体的に練りだしたのであろう．一方 Verlaine は迷いと焦躁のすえ，ついにパリ行きの決意をする．4月3日のことである．しかし一旦彼はベルギーの Jehonville におちつく．他方 Rimbaud は Roche に帰る．そしていよいよ S. E. の執筆にかかるわけである．1873年5月は彼は Delahaye にそのことを告げ，さらに «Mon sort dépend de ce livre...» とのべている．この言葉には S. E. をもって，彼のそれまでの人生と詩の総決算をこころみようとした意図があらわれているとわれわれは解釈したい．

つぎにブラッセルにおける傷害事件のあと8月8日にVerlaineの刑が定まる.一方7月下旬にRimbaudはRocheへの帰途につく,RocheではIsabelleの証言によると，彼はだんだん寡黙になり，悲しみに打沈み，Verlaineの名を嗚咽とともに咳いていたという．兎に角S.E.は完成し,原稿をJacques Poot社に渡すのであるが秋より翌1874年2月までの彼の生活は不明である．しかし10月24日にはブラッセルのHôtel Liégeoisの帳簿に彼の名を留めているところから，その頃ブラッセルに滞在していたことがわかる．そして,Henri Matarassoがのべているように,出版された*Une Saison en enfer*の一部を，24日に監獄にいるVerlaineに贈ったらしい．この事実とVerlaineが彼に送った詩*Crimen Amoris*を克明に筆写したことは，Rimbaudの友に対する気持が決して悪いものでなかったことを示すであろう．Berrichonは1873年4月初めのころのRimbaudの健康のみじめな状態にふれ，「彼の顔色は灰色がかり鉛色だった... そして秋まで恢復の徴候を示さなかった.」とのべているが，秋には健康もよくなり，感情もおだやかになり，不幸の意識も薄らいだと考えられる．期待したS.E.に対するパリ文学界の冷い反響はRimbaudの意気を消沈せしめたにちがいない．3月初めGermain Nouveauと渡英するのであるが，この決意は，何よりもS.Eの不成功に対する反発と新しい出発への意図から生れたのであろう．しかし今度のロンドン滞在期間中の精神状態は，Verlaineとの場合とちがって，安定していたのではないか．何故ならば母が息子のロンドン生活を，社会的地位を探すという条件で認めたと考えられるからである．その証拠にNouveauが6月にロンドンを去ったあと，Rimbaudが衰弱しきった時,母はVitalieとともに直ぐ彼のもとに駆けつけ，彼が社会的にポストを得るのを見届けるまで滞在しつづけた．Vitalieの日記によれば,[3] この間3週間余,母と娘は大きな部屋の快適なホテルで過し，いよいよ彼と別れる前7月29・30日には息子のためにいろいろ買物をしている．この事実から，母は物質的にも息子に協力的であったことがうかがえる．Dhôtelが，Rimbaudの母は，息子がロンドンへ発つとき，恐らく旅費を与えたであろうとのべていをが[4]，この

見方は真相に近いのではないだろうか.

以上２つの期間，つまり1872年秋より1873年春までと1873年秋より1874年初夏までの Rimbaud の生活を概観したが，この２つの期間のいずれに Ill. が制作される可能性と必然性があったかの究明にうつりたい.

2

序であげた問題点 a すなわち，何故 S. E. に Ill. の散文詩篇の引用がなされていないかを検討することからはじめる.

Chadwick は周知の如く Ill. の全作品は S. E. 以前に制作されたとの説をのべているが，われわれの問題点に対し次のように答えている.[5)]

それは原稿（詩も散文詩もすべて）を1873年８月に Rimbaud がもっていなかったからである．だから，比較的思い出し易い詩のみ S. E. にあげた．引用された詩が部分的に原詩と相違している事実からでもわかるように，Rimbaud が記憶によって，書いたことが判明する．彼が詩の原稿をもっていなかったのは，７月４日 Verlaine が突然ロンドンを発った時，すべての友の原稿を持ち去った．従ってそれは監獄の中に Verlaine の身廻品としてあった．しかし S. E. には Ill. の引用はないが，少くとも散文詩の中よりぬき出された若干の文や詩法の定義などが見出される，と.

以上の Chadwick の説に対して，われわれは疑念をいだかざるを得ない．次にそれを明らかにしよう.

1. たとい Verlaine が原稿を持ち去ったとしても，D. V. の引用されている *Délires* II は少くともブラッセル事件（７月10日）以前に制作されたと考えられるから，５月24日 Bouillon で Verlaine に会ったあと，２人はロンドンへ向い，７月４日まで当地に滞在している間，Rimbaud は自分の原稿に接する機会はあった筈である．従って記憶によってのみ詩を引用したと断言することはできないのではないか.

同じように散文詩を引用する必要があるならば，４月11日に Roche へ

Rimbaud が帰る時，原稿を Verlaine に預けていたとしても，その後約1ケ月余のロンドン滞在中（5月24日から）に，原稿に接することができた筈である，従って詩を記憶によって引用したのが事実ならば，*Délires* Ⅱの制作時期から考えると，8月に Rimbaud が原稿をもっていなかったということだけではなく，4月初めより7月4日までの間それがどこにあったかを明らかにする必要があろう．以上のような疑問点が解決しない限り，Chadwick の説は妥当性を欠いている．従ってわれわれは Rimbaud が原稿を S. E. 執筆時代に所有していたと考えたい．なお Françoise d'Eaubonne は，Verlaine が7月4日に原稿をすべて持ち去ったという説に対して次のように反論している．「7月4日彼 (Verlaine) は急遽下着と若干の書類の他何も持たずにロンドンを離れている... 自分の原稿をもっていたとしても，ごくわずかであろう．何故なら，彼の最初の気がかりの一つは Matuszewicz に彼の原稿を保管してくれるように頼むことであったから... 彼が自分のものですら完全に持ってゆくことが出来なかったのに，どうして友のものまでもってゆけようか．」[6] とのべているが，われわれはこの意見は説得性があると考える．

2. S. E. 以前に Ill. の全作品が制作されているという意見が正しいとした場合に，D. V. 19篇（*Fêtes de la patience* を4篇とす）のうち6篇引用されているに拘らず，Ill. 42篇のうち1篇も引用されていないということは如何なる理由によるものであろうか．完全に近い形でも，その一節でもよいわけである．兎に角この問題が重要であると考えるが，Chadwick はこれにはふれていない．

以上2点の疑問を指摘したが，われわれは Ill. の作品は大部分 S. E. 以後に制作されたものであり，たといその若干について習作または覚書程度のものが S. E. 以前にあったとしても，Rimbaud はそれらを統一した散文詩作品と見做していなかったと考えたい．だから *Délires* Ⅱ執筆当時には Ill. は存在しなかったと考えられる．

さて Guiraud は *Royauté*, *Veillées* など12篇を1872年の作と見做し，Ill. が S. E. に引用されなかった一つの理由について次のように答えている．つ

まり Délires II には「*Voyelles* への簡潔な暗示のほか，70年から71年の詩のいずれも引用されず，また風刺的に非難された詩は，この期のもっとも Verlaine 風のものであり，Rimbaud の独創的伝統に従っている *Mémoire, Michel et Christine, Honte, Qu'est-ce pour nous, mon cœur* は省かれていることが特に注目されるであろう.」[7] と.

しかしわれわれは Guiraud に対し疑念をいだく．たとい引用詩の *Larme* のように Verlaine 風の「奇数脚」また「11音節詩」があったとしても，引用された詩には Rimbaud 独自のテーマやイマージュが見られるからである．たとえば *Larme* の第2殕は，Voyant の満されぬ悲しみを歌った詩であり，これは *Mémoire* の花を摘むことのできない悲しみと同じ状景と思想をうたっていないだろうか．また *Chanson de la plus haute tour* については，この詩の前書に «Je disais adieu au monde dans d'espèces de romances :» とのべられているが，この世からの脱出のテーマは *Qu'est-ce pour nous* にもあらわれている．また *Faim* の «Si j'ai du goût ce n'est guère／Que pour la terre et les pierres.» という破壊のテーマは，*Honte* の «...Que les cailloux pour son flanc,» にもあり，両詩ともイマージュとして石を用いている．このようにわれわれは，S. E. に引用された D. V. は必ずしも Verlaine 風と限らないと考える．したがって Guiraud の答は正鵠を得ているとはいえないであろう．われわれは Guiraud の答をもって，S. E. へ Ill. の散文詩の引用がない理由の十分な説明であると考えることができないのである．

3

以上2研究者の意見について批判しながら本稿の目的である Ill. の制作時期の問題に近づいているわけであるが，ここで序の b にあげた問題点つまり，Ill. において新しくあらわれた Rimbaud の意識と詩法の考察にうつる．そしてそれらが，S. E. を挾む2つの期間のいずれに適合するかをしら

べたい.

Hallucination による Ill. の作品は S. E. の世界に類似している. しかしそれでも数々の相異点が見られる. われわれは Hallucination の詩とそれ以外の詩の2種類についてしらべたい.

A. 新しくあらわれた Rimbaud の意識の特徴は現実肯定の姿勢である. S.E. においては詩は «folie» によって実現されるものであった. «L'histoire d'une de mes folies.» (*Délires* II), «Ma vie ne fut que folies douces, c'est regrettable.» (*Nuit de l'enfer*) (因に Ill. には «folie» なる表現は一例もない.)

そして狂気より醒めると弱さの自覚しかのこらなかった. «Ma faiblesse, la cruauté du monde!» (*Nuit de l'enfer*)

さらに S. E. において «la sagesse première et éternelle» を獲得する力をもっているものは «ces féroces infirmes», «le forçat intraitable», «enfants de Cham», «sorcière» など, 現実社会, 世界, 文明, ヨーロッパなどから疎外された者であった. 詩人自身も現実をのがれようとした. «...il voulait tant s'évader de la réalité.» (*Délires* I)

しかし Ill. では一介の市民, 旅行者でも真理に到達しうる. «Je suis un éphémère et point trop mécontent citoyen...» (*Ville*), «le touriste naïf» (*Soir historique*), またやさしい老人 «un vieillard seul, calme et beau, entouré d'un «luxe inouï»» (*Phrases*) である. *Ouvriers* では愚かで貧乏人である「おれ」が, 平凡な時代おくれの服をつけた娘アンリカと郊外を一巡していた時, 突然別の世界が「おれたち」の前に展開する. «O l'autre monde, l'habitation bénie par le ciel et les ombrages!» このように現実は Rimbaud の詩的世界の中で重要な要素を占めている. また「あらゆる市民としての成功をうけているこの世界の中にいて」«par ce monde où je subis tous les succès civils,» 「瞬間の永遠の屈折と数学の無限」が「おれ」を駆りたてるという *Guerre* の記述も示すように, 市民社会である現実と詩人の接近がここでは浮彫りにされている. そしてついには詩人の

詩業が現実に迎えられ，正当に評価されるにいたる．この思想を端的にのべているのは *Jeunesse* II である．詩的世界の「踊りと声」が「イマージュのない（現実）世界のなかで親しく控え目に生活する人々により，発明と成功という2つの出来事のおかげで正当に認められる.」というくだりは，もはや S. E. の死を喚起し，衰弱の中に，むごく悲しい現実に真面し，自己の弱さを自覚する *Nuit de l'enfer* の末尾にのべられた世界とは異なったものである．

次に Ill. では «souvenir» に新しい価値が与えられたことに注意すべきであろう．«...j'essaye de m'émouvoir au souvenir de l'enfance mendiante,...»（*Vies* II）の「思の出に心を動かそうとつとめる.」という意識は «souvenir» に積極的な働きを認めていることを示す．つまり Ill. では，錯乱と苦悩のさなかに詩的体験を成就しようという Voyant の原理確立以来の考え方は退き，新しく，作為によらない «souvenir»，つまりより現実的な意識を重要な要素と考えたことを物語っている．さらに «souvenir» によって神聖化されるという意識も起っている．*Matinée d'Ivresse* の次の言葉がそれである.«...sacrés soyez-vous par le souvenir de cette veille.» 加えて，思い出の作用として注意したいのは *Ouvriers* の冒頭のように «souvenir» が詩の発端をつげていることである．«Le Sud inopportun vint relever nos souvenirs d'indigents absurdes, notre jeune misère.» *Jeunesse* I では目指す «l'étude» に属する «calculs» を傍らにおき，一方 «souvenirs» に耽る詩人の姿を描いている．Rimbaud はこのように思い出に創造的能力を与えているが，この思想を明確に理論化したのは次の言葉によってである．«Ta mémoire et tes sens ne seront que la nourriture de ton impulsion créatrice.»（*Jeunesse* IV）これは S. E. において，Rimbaud が「思い出」を葬らねばならなかったのに比べて対照的である．«Eh bien! je dois enterrer mon imagination et mes souvenirs.»（*Adieu*）

次に詩人と自然の関係の変化があげられよう．Ill. では現実の平凡な自然物の詩的世界への参劃を，idyllique な方法で示していることである．しか

も自然が詩人に告知することが特徴としてあらわれる．a．«Puis, dans la futaie...Eucharis me dit que c'était le printemps.» (*Après le déluge*) b．«...elle me fit remarquer de très petits poissons.» (*Ouvriers*) c．«La première entreprise fut,...une fleur qui me dit son nom.» (*Aube*) d．«Par la plaine, où je l'ai dénoncée au coq.» (*Ibid.*)

以上のように現実は詩人 Rimbaud にとって拒否と反抗の対象ではなく，却って詩的創造の契機となったり，彼を包摂しまた認めるものとなっている．現実というのは外的現実つまり自然や社会のみではなく，内的現実すなわち，作為もない現実的感覚や思い出までも含めたものを意味する．後者は感覚の錯乱や幻覚ではないのである．このような現実に対する Rimbaud の意識は1において考察した第2の期間の彼の生活状況に合致すると考えたい．

B．次に Ill. にあらわれた新しい詩法について考察したい．第一はイマージュの空間構成が構築的であり調和的であることがあげられる．構築的であるといってもより絵画性を帯びている．その中で特に「左右」「斜面」の構成にふれる．先ず «droite» と «gauche» についての例を以下に示すと，«A droite l'aube d'été éveille les feuilles et les vapeurs et les bruits de ce coin du parc, et les talus de gauche tiennent dans leur ombre violette les mille rapides ornières...» (*Ornières*), «A gauche le terreau de l'arête est piétiné par tous les homicides et toutes les batailles, et tous les bruits disastreux filent leur courbe.» (*Mystique*), «...dans un défaut en haut de la glace de droite tournoient les blèmes figures lunaires,...» (*Nocturne vulgaire*) があり，«talus» また «versant» については，上掲の *Ornières* にあるほかに，«Des fleurs magiques bourdonnaient. Les talus le berçaient.» (*Enfance* II), «Sur la pente du talus les anges tournent leurs robes de laine...» (*Mystique*), «La douceur fleurie des étoiles et du ciel et du reste descend en face du talus,...» (*Ibid.*), «...des talus de parcs singuliers penchant des têtes d'

Arbre du Japon ; » (*Promontoire*), «Sur les versants des moissons de fleurs grandes comme nos armes et nos coupes, mugissent.» (*Villes* I) があげられる．au-dessus deやen haut de など他に空間構成を示す語は多数にのぼるが，これらの組合せによって独特の世界をつくり上げ，しかも複雑な構成の中に調和をはかっていることに注意したい．例えば *Mystique* にその成果がうかがわれる．この方法を明確に提示したのは *Jeunesse* IV の次の言葉であろう．«Mais tu te mettras à ce travail : toutes les possibilités harmoniques et architecturales s'émouvront autour de ton siège.»

なお「斜面」について，Jacques Plesson は「逍遙人にとって，斜面はまた，世界を観察するためにすばらしい場所である．」[9] とのべているが，われわれはこの解釈に加えて，次のことを指摘したい．前掲文の *Enfance*, *Mystique*, *Villes* I の例にあるように，「斜面」は優しさまたは豊麗（その象徴としての天使，花々）のイマージュと結合していることである．しかも *Enfance* よりも，*Mystique* や *Villes* I の例の方がイマージュ表現に意匠を凝らしていることが明らかである．従ってわれわれは，後者２篇は前者よりも制作時期が後に属すると考えたい．

ところが以上のような独特の空間構成は D. V. にも S. E. にもないことをわれわれはしるのである．ごく単純な形ならば S.E. に１例のみ見出されよう．«...et, à gauche, à droite, toutes les richesses flambant comme un milliard de tonnerres.» さて Starkie は，1872年冬に Rimbaud の「霊感は純粋な神秘主義から物的題材へと移行していった．その時おそらく *Villes* のような新しい形式の散文詩，*Illuminations* を制作しはじめたようだ．」[10] とのべている．しかし *Villes* にあらわれている空間構成が，もし S. E. 以前に Rimbaud の詩法として確立していたならば，本項で示した特徴が，何故 S. E. にあらわれなかったのかという問題が生じる．われわれは本稿 5 において *Villes* の制作年代につき考察をするが，少くとも空間構成の点では *Villes* は *Enfance* より後すなわち1874年ロンドン滞在中に制作

されたと考えられる．従って Starkie の説に同意しがたいのである．

次に詩法の第2の特徴である「月」のイマージュの考察に移りたい．Marc Eigeldinger は，Rimbaud における「太陽」が「詩的使命，普遍的愛，革命的力」を表現するとのべているが[11]，Rimbaud が「太陽」に如源の純潔の象徴としての役割を，初期の詩から Ill. にいたるまで与えてきたことは言うまでもない．

さてわれわれは Rimbaud の詩的世界における「月」の役割についてしらべてみたい．まず想起することは «Toute lune est atroce et tout soleil amer:» (*Bateau ivre*) である．この「月」は voyant の世界の体験に疲れはてた詩人の眼にうつる残酷な存在としてあらわれるが，特に月がそれ自体独立したイマージュとしてはあらわれていない．この場合「太陽」と同質なのである．さて D. V. では「月」はいかに出現しているであろうか．1. «Les Grands!／Couverts des froides sueurs／De la lune et des verdures.» (*Comédie de la soif*), 2. «La nuit, l'amie oh! la lune de miel／Cueillera leur sourire et remplira» (*Jeune ménage*), 3. «...Après, le clair de lune! partout la lande,／Rougis et leurs fronts aux cieux noirs, les guerriers» (*Michel et Christine*), 4. «Regret des bras épais et jeunes d'herbe pure!／Or des lunes d'avril au cœur du saint lit! Joie» (*Mémoire*), 5. «Dans sa vapeur nette,／Vers Phœbé! tu vois／s'agiter la tête／de saints d'autrefois...» (*Entends comme brame*) 以上5例があげられる．内容を考察すると，1は祖父母の浴びる月光であり，2は月の光を若夫婦の蜜月にかけた比喩であり，3は戦士たちの額にそそぐ月の光であり，4は川床の奥にさす月の光である．5は月の神としてあらわれているので，«lune» 自体をさすのではないと考える．これらの例に明らかなように5をのぞいて，他はすべて場景にそえられた月光としてあらわれている．しかも S. E. では月は *Nuit de l'enfer* に «*le clair de lune*» としてあらわれているのみである．«Ah! l'enfance, la pluie, le lac sur les pierres, *le clair de lune quand le clocher sonnait douze*...» 最後に Ill.

ではどうであろうか．1. «Depuis lors, la Lune entendit les chacals piaulant par les déserts de thym,» (*Après le déluge*), 2. «C'est peut-être sur ces plans que se rencontrent lunes et comètes, mers et fables.» (*Enfance* V), 3. «Les Bacchantes des banlieues sanglotent et la lune brûle et hurle.» (*Villes* I), 4. «A sa vision esclave, l'Allemagne s'échafaude vers des lunes;» (*Soir historique*), «...et dans un défaut en haut de la glace de droite tournoient les blêmes figures lunaires, feuilles, seins;» (*Nocturne vulgaire*) これらの中で5の例をのぞいて，他の例ではすべて「月」は独立し，詩的世界の一要素としてのイマージュの働きを示している．D. V. と S. E. では「月」は月光としてあらわれたに過ぎないが，Ill. においては「月」としてあらわれ，しかも詩の世界への参加を鮮やかに示している．この詩法は明らかに Ill. 時代にはじめて出現したものである．従って Ill. を D. V. と S. E. の間に位置づけるのは妥当ではないと考えられよう．

4

次に序にあげた問題点 c に従って D. V. および *Les Déserts de l'amour* と S. E. における Rimbaud の，詩的世界の本質に結びついた支配的な意識と感情をとりあげ，それが Ill. においていかに出現しているかを考察し，それらが持続して Ill. に用いられている場合，変化している場合，消失している場合のおのおのにつき検討し，S. E. と Ill. との関係を明らかにしたい．

A．先ず意識の考察からはじめる．

1. Bonheur. ランボオの精神における最も本質的な志向の対象に «bonheur» がある．これは1872年春から顕著にあらわれている．*O saisons, ô châteaux* の «J'ai fait la magique étude／Du Bonheur, que nul n'élude» にあらわれているとおりである．*Les Déserts de l'amour* にも同じ内容をもって見出される．«O fatigue! Noyé dans la nuit sourde et dans

la fuite du bonheur.»

S. E. では，冥府の無垢を体現する毛虫や，童貞の眠りをあらわすもぐらの「幸福」を羨み——決定稿では «félicité» だが，草稿では «J'ai réfléchis aux bonheur des bêtes» となっている——ついにそれを見出したよろこびをのべている．«Enfin, ô bonheur, ô raison, j'écartai du ciel l'azur, qui est du noir, et je vécus, étincelle d'or de la lumière *nature*». (*Délires* II) そして「彼」はすべての存在が «une fatalité de bonheur» (*Ibid.*) をもっていることを知った．このように «bonheur» の意識は1872年春より1873年夏まで持続している．ではこのライトモチーフは Ill. ではいかに取扱われているだろうか．«bonheur» としてあらわれているのはただ1例 *Conte* においてである．(同じく «heureux» も Ill. にはない.)[12]

2. Malheur. この意識は1872年8月の *Fétes de la faim* にあらわれている．«—C'est l'estomac qui me tire./C'est le malheur.» さらに *Qu' est-ce pour nous* においても «O malheur! je me sens frémir,» とうたわれている．これは純潔を得るために苦痛と破壊に対する呼びかけなのである．他に D. E. では «infortune» としてもあらわれる «Vis et laisse au feu/L' obscure infortune.» (*Age d'or*)

この意識はもちろん S. E. においては主要ライトモチーフとなっている．«Parents, vous avez fait mon malheur...» (*Nuit de l'enfer*) となげくが，「不幸」は «la sagesse première et éternelle» (*L'Impossible*) を失った人間の蒙らねばならぬ苦痛にほかならないのである．「おれは不幸に泣きながら «pleurant au malheur» 激怒した群集の前に立っていた」(*Mauvais Sang*) のである．このように1872年春より S. E. 時代にいたるまで「不幸」の意識によって Rimbaud は滲透されていたといえよう．このことは1においてのべた彼の現実生活を全く反映していると考えるものである．事実，彼の日々は «Jour de mallheur!» (*Fausse conversion*) であり «Déchirante infortune!» (*L'Impossible*) だったのであろう．

では Ill. においてはどうか．われわれは *Génie* において1例見出すのみ

である．«O monde! et le chant clair des malheurs nouveaux!» しかしこの «malheurs» は新しい質転換をしていることに注意したい，因に Ill. には «infortune» という表現もない．

3. Enfer. この意識は既に1872年の夏から徐々に Rimbaud において形成されてきたと考えられる．絶対に到達するために，秩序を破壊し，限りない殺戮への望みをうたう *Qu'est-ce pour nous* の «...les longs cris／De rage, sanglots de tout enfer renversant／Tout ordre;» はすでに S.E. の「序」の世界に類縁性があることが認められる．さて S.E. における «enfer» の重要性はいうまでもないことであり，その表現をいま枚挙することは省くが，Ill. においてはどうだろうか．1例もないのである．しかし形容詞として *Solde* に1例用いられている．«...ce qu'ignorent l'amour maudit et la probité infernale des masses;» しかしこの表現はすでに過去となった詩業の回想として存在していることに注意したい．

4. Faiblesse. この意識は *Les Déserts de l'amour* に見出される．«...dans ma faiblesse indicible, je tombai sur elle...» S. E. においては «La morole est la faiblesse de la cervelle.» (*Délires* II) また «...et par une route de dangers ma faiblesse me menait aux confins du monde...» (*Ibid.*), «Oh! oh. C'est la faiblesse, c'est la bêtise, moi!» (*Brouillon; Mauvais sang*) の諸例がある．つまり自己が詩人として凡ゆる苦悩に耐える力の喪失を自覚し，あるいは現実の自己の無力・弱さを感じる時の意識を Rimbaud は «faiblesse» となづけている．この表現は Ill. にはあらわれていない．

5. Ennui. これは *Bannières de mai* にあらわれる意識であるが，S. E. では詩人が克服せねばならぬ対象として描かれている．«Allons! La marche, le fardeau, le désert, l'ennui et la colère.» (*Mauvais sang*), «L'ennui n'est plus mon amour.» (*Ibid.*) 一方 Ill. では3例，それぞれ *Après le déluge, Enfance, Génie* にあらわれる．*Après le déluge* のそれは，純潔の世界が消失したあとの無力感をのべたものである．«—oh les pier-

res précieuses s'enfouissant, et les fleurs ouvertes!—c'est un ennui ! »
この観点から *Après le déluge* は S. E. の世界に結びつくが，S. E. の後の時期に制作されたものであろう．この制作時期の問題については本稿 5 において後述する．次に *Enfance* 1 の «ennui» を分析する．«Quel ennui, l'heure du «cher corps» et «cher cœur».» は，Bernard のいうように，Rimbaud が Verlaine に倦み，突然 2 人の間に生れた断絶と現実への覚醒を示すものであろう．[13] 従って *Après le déluge* と同一の地平にあらわれた意識として解釈できよう．

6. Orgueil. これは詩人としての自負を示した意識である．S. E. の諸例を引用する．«...j'ai un jugement sain et arrêté je suis prêt pour la perfection...Orgueil.» (*Nuit de l'enfer*), «mon enfer pour l'orgueil» (*Ibid.*), «l'orgueil des inventeurs,» (*L'Impossible*), «Le travail paraît trop léger à mon orgueil:» (*L'Eclair*) さて Ill. においては *Génie* と *Jeunesse* Ⅳ に 1 例づつ見出されるのみである．しかも *Génie* においては，S. E. におけるような詩人の超自然的力を自負した «orgueil» を，超えたものとして記述されており，«O lui et nous ! l'orgueil plus bien bienveillant que les charités perdues.», *Jeunesse* では «les tics d'orgueil puéril» に示されているように，S. E. における居丈高な態度はかげをひそめていることに注意したい．

7. Innocence. いうまでもなくこれは，Rimbaud がもとめた窮極の世界である．彼の Delahaye 宛の1873年 5 月の手紙にも «O innocence ! innocence ;» があらわれている．S. E. における諸例をのべると次のようである．«Apprécions sans vertige l'étendue de mon innocence.» (*Mauvais sang*) 他に *Mauvais sang* には 2 例見出される．*Délires* Ⅱ では «—les chenilles, qui représentent l'innocence des limbes,...» がある．なお同じく近代によって穢されていない純粋なる状態を «pureté» として表現しているが，これは *L'Impossible* に見出される．さて Ill. ではどうであろうか．«innocence» は *Vagabonds* に 1 例見られるのみである．そして «pureté»

は1例もない.

8. Richesse と Trésor. これらは Rimbaud の詩的世界でイマージュの豊麗さを示す重要な語であるが, D. V. にはすでにあらわれている. Où la richesse de la ville／Rira sous de faux cieux.» (*Bonne pensée du matin*) S. E. においては, «...à gauche, à droite toutes les richesses flambant comme un milliard de tonnerres.» (*Mauvais sang*) とのべられているほか, 同章ではさらに2例, *Délires* I では1例見出される. これに加えて詩的世界の貴重な価値を示す表現に «trésor» があげられよう. «O sorcières, ô misère, ô haine, c'est à vous que mon trésor a été confié!» (S.E. の序) があり, *Mauvais sang* には1例, *Nuit de l'enfer* に1例があらわれていることをしる. 一方 Ill. においては, «richesse» が2度見られる. «Je vous indiquerais les richesses inouïes. J'observe l'histoire des trésors que vous trouvâtes.» (*Vies* I) と «Les richesses jaillissant à chaque démarche!» (*Solde*) である. 次に «trésor» については2度あらわれている. 上記の *Vies* の引用文に «richesse» とならんで用いられているのと, *Jeunesse* II においてである. しかしこれらの語の頻度は S. E. に比べて少いといわねばならない. しかしながらこのことは Ill. において, 詩的世界の豊麗さを示す表現が消えたことを意味しない. それは後述するように別の表現 («luxe») によってなされているのである.

B. 次に詩的体験の本質に結びついた感情についてふれる.

1. Tristesse. *Les Déserts de l'amour* において, 美しく, 気高くて純潔であった「女中」も去り (詩的体験の失敗を物語っている), 絶望した主人公は悲しみにうちしずんでいるが, その姿は次のように描かれている. «...et je me suis abîmé sous la tristesse amoureuse de la nuit.» このような純潔を獲得することの挫折を示す «tristesse» の感情は S. E. にそのまま持続され, «malheur» の意識とともに頻繁に Rimbaud を襲っているようである. 次に2例を示そう. *Délires* I においては, 狂気の処女の「悲しみは絶えずあらたにされ」«mon chagrin se renouvelant sans cesse,»,

そしてまるで2人は暗い和合の世界である «le Paradis de tristesse» を徘回する子供達のようである．また地獄の夫は彼女に自分の悲しみを説明するであろう．«S'il m'expliquait ses tristesses, les comprendrais-je plus que ses railleries ? ». Ill. においてはどうであろうか．«tristesse» は1例のみ *Après le déluge* にあらわている．

2. Haine. この感情は末開の財宝へわれわれをみちびく条件である．«O sorcières, ô misère, ô haine, c'est à vous que mon trésor a été confié ! » (S.E. 序) また崇高な野心を示す．«Ah : les nobles ambitions ! ma haine.» (*Brouillon : Fausse conversion*) しかしこの表現は Ill. では1例もあらわれていない．

3. Colère と Rage. «colère» は S. E. において，«Je devrais avoir mon enfer pour la colère,» (*Nuit de l'enfer*) にあらわれるものを含め計3例，«rage» については «Je veux devenir bien fou de rage.» (*Délires* I) の他1例あるが，Ill. においては *Génie* に1度づつ «colère»» と «rage» はあらわれている．しかしこれも後述するように，«Orgueil» の時とおなじく S. E. をすでに超えた状況における感情に変化しているのである．

以上 S.E. にあらわれた Rimbaud の支配的な意識および感情を D. V. と *Les Déserts de l'amour* との連関のもとに論じ，Ill. における出現の状態をしらべた結果，次の通りまとめられる．«enfer» • «faiblesse» • «haine» なし，«bonheur» • «malheur» • «innocence» • «tristesse» • «colère» • «rage» 各1例，«orgueil» • «richesse» 各2例，«ennui» 3例．このように数は少いのである．しかもたとい出現していても S. E. と異った状況においてあらわれているか，また S. E. をのり超えたものとしてあらわれている場合が多かった．同時にわれわれは «bonheur», «malheur», «enfer», «faiblesse» などが，*Les Déserts de l'amour* をふくむ D. V. と S. E. を結合する期間において共通した Rimbaud の意識と感情であることを示したが，このような D. V. と S. E. との間の連続性の中へ，Ill. を位置づけること，つまり1872年秋より翌年春までに Ill. が制作されたと考えることに疑念をいだくも

のである．従ってわれわれは Ill. を S. E. につづく時代に位置づける方がより妥当であると考えたい．しかもこの推定は，1 で追った1873年秋以降の彼の新生によって裏付けられ，また 2 で分析した新しい意識と詩法に一致するのではないだろうか．

次にわれわれが 3 の考察より推論できることは，«bonheur»，«ennui»，«tristesse» などが，Ill. にあらわれていることから，それらを含む作品を，S. E. 時代の彼の思考・感情の余燼がのこっている時期に制作されたと考え得ることである．この観点からわれわれはそれらの作品を Ill. の初期の作品と考えることができよう．次に 3 の分析から Rimbaud の執筆態度について次の解釈が許されないだろうか．彼は以上の語の使用に関しては非常に意識的で慎重であったと．例えば «enfer» については，われわれは *Matin* における次の彼の断言をしっている．«Pourtant aujourd'hui, je crois avoir fini la relation de mon enfer.» そして Ill. にはもはや «enfer» という表現はないことからも彼の態度がうかがわれるのではなかろうか．

しかし留意すべきは，たとい Ill. に «enfer» や «faiblesse» が見当らず，«bonheur» や «malheur» が 1 度づつしかないからといって，これらの意識が全然消滅したとは結論できない．他の表現で示されているわけである．われわれはいまよりこの問題を考察するが，このことによって，Ill. 自体の中で Rimbaud の思考と詩法がいかに変化してゆくかを識ることができるし，また初期の作品と後期の作品とを分別する方法を確立できるのではないだろうか．«bonheur» に代る高度のよろこびについては，«la vérité, l'heure du désir et de la satisfaction essentiels.» (*Conte*) や 新しい調和 «la nouvelle harmonie» (*A une raison*)，また «l'extase harmonique» (*Mouvement*»，«Amour, force !—plus haut que toutes joies et gloires !» (*Angoisse*)，«l'amour, mesure parfaite et réinventée,» (*Génie*) によって示されている．«malheur» についても，«un guignon» (*Vagabonds*) という表現がその代りをしているのも一例であろう．しかし不幸の意識が少いことは，現実生活でも Verlaine の同棲時代ほど悲惨ではなく，また詩法

の見地からいっても錯乱の苦しみを必須とした Voyant の時期とは異なり，1873年秋以降の「現実」に接近した彼の意識には深い不幸があらわれなかったことを物語っていると考えたい．その代り *Vies* II に示されているように懐疑主義があらわれている．«...l'air sobre de cette campagne alimente fort activement mon atroce scepticisme.»

«innocence» についてはどうであろうか，われわれは *Vagabonds* に1例見たが，同じ意識状態をあらわすものとして «la franchise première» (*Angoisse*) を見ることができる．

«enfer» の場合．*Conte* のテーマつまり破壊と残虐によって新しい愛のに実現をはかるという時でも，また*Matinée d'ivresse* や *Angoisse, Métropolitain* のような S. E. に類似性のある作品においても，«enfer» の意識はあらわれておらず，また «la mort» の観念の表現もない．

«ennui» の場合．これは前述したように *Après le déluge, Enfance, Génie* に出現するが，われわれはこれらの作品を S. E. に接近した時期につくられたと考える．つまり初期の作品と見做したい．以後 «ennui» は Ill. には消えているが，この精神状態は別の表現で示されているのである．例えば，«C'est le repos éclairé, ni fièvre, ni langueur.» (*Veillées*) の «langueur» によって，また次のように詩的体験の嵐のあとであらわれる．«Les desperadoes languissent après l'orage,» (*Jeunesse* I)．同散文詩のIIIには，花々が咲いたあと，歌も消えうせたあとの世界に湧く倦怠を，«l'impuissance et l'absence» として描いていることをわれわれは識る．これを，*Après le déluge* の «...et les fleurs ouvertes!—c'est ennui!» に対比させると，その思考の類似性にも拘らず，表現の明らかな変化がみられることに気づくのである．この変化は *Après le déluge* や *Enfance* と *Jeunesse* の制作時期の前後を決定する役割を果すものと考えられる．

«richesse» と «trésor» の場合．これに代るものとして Ill. には «luxe» があげられる．6例あって，*Conte* に2例，*Parade, Phrases, Vagabonds, Jeunesse.* にそれぞれ1例づつである．*Conte* と *Parade* のは贅沢を意味す

るから，除外するが，のこる *Phrases* の «un vieillard seul, calme et beau, entouré d'un «luxe inouï»», また «Je créais...les fantômes du futur luxe nocturne.» (*Vagabonds*), «la curiosité...de luxes oisifs» (*Jeunesse* IV) の «luxe» は «richesse», «trésor» に加えて，Ill. に新しくあらわれた詩的世界の豊麗さを示す第3の語といえよう．

次に感情の分析にうつるが，«tristesse» は *Après le déluge* に1例のみあらわれている．他に «chagrin» が2例，«triste» は1例であるが，全体として「悲哀」の表現は Ill. には少いといえる．特に «pleurer» が一度もあらわれていない事実がそれを証明している．これに対して *Les Deserts de l'amour* および S. E. では «pleurer» は頻繁にあらわれている．«colère» も *Génie* に一度のみであった．また «haine» は Ill. には皆無であり，«terreur» は *Parade* に1例，«horreur» は *Matinée d'ivresse* と *Soir historique* にのみ1例ずつ見出される．これらの事実は，Ill. の世界が1で考察した第2の期間つまりより平静な時代を反映しているとみるべきではなかろうか．

5

以上 D. E. および S. E. における Rimbaud の意識と感情に関し，それらの Ill. への出現の状態を考察し，またそれらの変化のあとをたどり，Ill. の初期の作品にある程度照明を与えることができたが，これより個々について綜合的に検討したい．

先ず *Vies* の場合．«la richesse» «le trésor» «la sagesse» はすべて S. E. と同じ内容であらわれている．また *L'Impossible* で Rimbaud が放棄した «inventeurs» が再びあらわれている．«sagesse» も «caresse» も S. E. の世界と内容が同じである．（なお後者の2つの表現は Ill. では *Vies* にしかあらわれていない）このように *Vies* は S.E. に類似するところが多多あるが，必ずしも S. E. と同時代に制作されたことを意味しないであろう．Bernard がのべているように，[14] «...d'ailleurs je suis dévoué à un

trouble nouveau,» や «Je suis réellement d'outre-tombe,» という表現は，S. E. 時代をすぎたことを示している．われわれは Bernard のこの解釈に加えて，Ⅲの «Dans une magnifique demeure cernée par l'Orient entier j'ai accompli mon immense œuvre et passé mon illustre retraite.» における «retraite» について一言したい．この語は D.V. の *Chanson de la plus haute tour* に «Et sans la promesse／De plus hautes joies.／Que rien ne t'arrête,／Auguste retraite.» にうたわれていることを想起さす．このことから *Vies* の Rimbaud は，厳かな隠遁時代をはるかに振返って回想していることがわかる．なお先に «mon atroce scepticisme» に触れたが，この思想も S. E. 後にあらわれたものである．従ってこの作品は S.E. 完成後まもなくして制作されたと考えることができよう．これに関連して，*Départ* は，過ぎ去った Vision の世界を顧み新しい出発をつげているが，*Vies* と同時代に制作されたものであろう．しかもリュシヤン・グロー原稿では *Vies* と同じ用紙にかかれている．

Génie の場合．4 において分析した S. E. の支配的意識・感情が全 Ill. の中で，ここだけにしかあらわれない数が多いのである．«malheur», «charité», «péché», «colère», «rage», «souffrance» があげられよう．その他に «ennui» と «orgueil» がある．そしてそれがすべて S. E. を超えているのである．«Génie» が空をすぎてゆくのは「われわれが激怒 «rages» や倦怠 «ennui» のうちに立っている」時であるし，S. E. で Rimbaud が «O mon abnégation, ô ma charité...» (*Mauvais sang*) とのべた «charité» も見事に棄てられ，次の言葉があらわれるのである．«O Lui et nous! l'orgueil bienveillant que les charités perdues,» そして «malheur» も新しい質転換を告げていることは前述したとおりである．従ってわれわれは *Génie* を S. E. に接近した初期の時代，つまり1873年末から1874年の春までに制作されたと考えたい．*Génie* を Rimbaud の筆による最後の作品であると見做す Stanislas Fumet の説[15]，Yves Bonnefoy がのべる1874年秋制作と見做す説[16]には疑念をいただくものである．

次に *Enfance* は初期の作品に属すると考えたい．何故ならば 4Aの 5 においてふれたように S. E. 時代の延長上に，しかも比較的接近して位置すると，見做されるからである．殊に *Enfance* I の花々のイマージュ，«A la lisière de la forêt—les fleurs de rêve tintent, éclatent, éclairent,» は *Après le déluge* の «—les fleurs qui regardaient déjà.» と類縁性がある．また «Les pierres regardèrent,» (*Aube*) は，*Après le déluge* の «Oh! les pierres précieuses qui se cachaient,» に対応しているから，*Enfance, Aube* は *Après le déluge* などの一群に結びつけることができる．これは他の類似性でさらに裏付けられよう．すなわち，2 で考察したように，idyllique な方法による自然の詩人に対する告知は *Après le déluge* に見られたものだが，これと同じ方法が *Aube* にもあるからである．

さて *Vagabonds* は，Ill. で一度だけあらわれる «innocence» を示しているが，この作品もまた S. E. 時代の延長上，しかも比較的後者に接近した時代に制作されたものであろう．とくに «en hurlant son songe de chagrin idiot» の «chagrin» は，S. E. の Vierge folle の悲しみに繋っているといえよう．なお *Vagabonds* を，1873年春に一時 Rimbaud が帰国した時制作したという説があるが，4 の A8 においてのべたように «les fantômes du futur luxe nocturne» の中の «luxe» は，1873年秋以降に，«richesse» の代りにはじめてあらわれたものであるから，S. E. 以前にこの作品を位置づけることは妥当ではないと考えたい．

Bouillane de Lacosteが，Ill. の原稿のなかに Germain Nouveau の筆写した作品があることを立証した[17] ことは周知である．その作品は *Villes* II と *Métropolitain* であり，その原稿の一部分に Nouveau の筆写が見分けられたのである．

われわれは Lacoste の説に従って，この筆写は1874年 3 月から 6 月初めまでの Rimbaud と Nouveau とのロンドン生活中になされたものと考えるならば，少くとも *Villes* II および *Métropolitain* は1874年 6 月までに制作されていたといえよう．*Villes* II と類縁関係にあるものは *Villes* I であ

るが，後者については3のBで指摘したように，*Enfance* よりも後に制作されたとわれわれは考えたいが，*Villes* II の原稿がロンドン滞在中に書かれたと立証されているから，*Villes* の両篇は1874年の春に執筆されたと考えることができよう．*Enfance* はそれ以前に完成していたであろう．

Germain Nouveau の *Notes Parisiennes* は *Illuminations* と同時代に制作されたと見做されている[18]．事実，両者を比較すると *Notes Parisiennes* は，そのテーマ，イマージュとも Ill. に似ており，特に *Enfance, Villes* I に類似性が多く見出されるのである．例えば *Notes Parisiennes* II の冒頭にある，«Niniche» の堂々たる歩みぶりを描いた ««Niniche», aux boulevards, se fait suivre des cœurs à millions,» 中の，«boulevards» は *Villes* I にあらわれており，また «Sa pensée habite un Mabille de rêve.»（*Notes* II）と «Des cortèges de Mabs»（*Villes* I）とを対比すると，夢のマビルの国 «Mabille» と妖精マブ «Mabs» とは類縁性がないとはいえない．つまり Nouveau が Mabs から暗示をうけたとも考えられる．また «un Mabille de rêve» は «ces Libans de rêve»（*Villes* I）を想起さす．次に *Notes* II における，次の表現 1. la lèvre assyrienne 2. le sourire de l'idole 3. la jambe nue, 4. en fleurs idéales, 5. Sur la mousse d'or du tapis は，*Enfance* I の 1. la fille à lèvre d'orange, 2. Cette idole, 3. nudité qu'ombrent... les arcs-en-ciel, 4. les fleurs de rêve 5. dans la mousse vert-de-gris にそれぞれ対応しており，また *Notes* II の «Le plafond s'effondre en fleurs idéales;» は，*Scènes* の «Des scènes lyriques... s'inclinent dans des réduits ménagés sous les plafonds,» に類似している．なお «s'effondre» という表現はそのままで *Villes* I の «Le paradis des orages s'effondre.» の中にあらわれている．

次に *Notes Parisiennes* III の考察に移る．岩壁のあいだにそびえる城で «La princesse» が Mlle de Grignan に出会う場景，«et le château dans les rochers, où elle descend le perron, à l'encontre Mlle de Grignan...» における「石段をおりてくる」という描写は *Enfance* II の «La

jeune maman trépassée descend le perron.» にも見出されるのである．その他，妖精物語の女王の帰りくる姿を描いた *Notes* Ⅲ の «La voici revenir, reine des contes bleus, vue au pâle incendie de la nuit d'été .» は *Parade* の «Des yeux hébétés à la façon de la nuit d'été,...» を想起さす．

以上の数々の類似性は，Nouveau の Ill. 原稿筆写問題を離れても，少くとも２人のロンドンでの共同生活中に上にのべた Ill. の諸詩篇がすでに制作されていた，また制作されたという事実を裏付けるものではあるまいか．

さて最後に *Angoisse* に触れてみたい．この作品の末節の表現，«Rouler aux blessures, par l'air lassant et la mer ; aux supplices, par le silence des eaux et de l'air meurtriers ;...» は S. E. 時代と明らかに類似している．しかしここには詩人の «La mort» の観念はない．また «des eaux et de l'air meurtriers» という表現は，S. E. よりも *Jeunesse* Ⅲ の «Les airs et les formes mourant...» に近いと考えたい．なお「つぎつぎに踏みつぶされゆく野心」と Rimbaud が述べた背景には，*Une Saison en enfer* 発刊後のパリ文学仲間達の彼に対する無視と冷淡に直面した彼の心情がうかがわれる上に，それに対する反発が «un jour de succès» を夢想させたと解釈できないだろうか．また «la franchise première» は S. E. の «la sagesse première et éternelle» に代るものであり，明らかに S. E. 時代を過ぎたことを示している．（4のＡ７参照）従ってわれわれは Bernard が *Angoisse* を S.E. と同時代の作品とする説には疑念をいだくものである．この作品はS.E.後に書かれた初期のものに属すと考えたい．なおこれと *Métropolitain* との原稿は同じ用紙にかかれていることも考慮すべきである．

以上われわれは，Ill. の初期の作品群をもとめて，２つの方法を設定した．先ず D. V. と S. E. にあらわれていない Rimbaud の意識と詩法を把握し，それらは第２の期間すなわち1873年秋より以降に生ずる可能性と必然性があることを指摘し，次に S. E. にあらわれる支配的な意識と感情は，D. V. と

Les Déserts de l'amour にはつながっているが，Ill. では若干の作品にしか現われず．殆んどは消失しているか，変容していた．従ってわれわれは，S. E. 時代の意識と感情がそのまま用いられている Ill. の若干の作品を，一応 S.E. に接近した時期に制作されたものと仮定し，それらを1で考察した Rimbaud の生活および精神風土との関連のもとに，果して第2期に適合するかどうかを確めた．そしてそれらを残った Ill. の諸作品と比較し，Ill. 自体における表現の変化を具体的に示し，その中で初期の群とそれ以後の作品に属するものを区別し，綜合的に初期の作品を決定しようとこころみたわけである．その結果 *Après le déluge, Enfance, Vies, Départ, Ouvriers, Vagabonds, Aube, Angoisse, Génie* の諸篇がえらびだされ，それらを S. E. 後より 1874 年の初春までに制作されたと考えたのである．このようにして，われわれは Ill の残る作品の制作年代を決定してゆく端緒をつかむことができよう．ただ留意すべきは，D.V. より *Les Déserts de l'amour* をへて，S.E. にいたる期間の支配的意識・感情が，殆んど Ill. において消滅したとはいうことができない．本稿4の後半において分析したように，それらは感情の強度の相違，意識の密度の差はあっても，他の表現によって示されていることである．Rimbaud の本質的なものを看過すべきではないと考える．

註

1) Charles Chadwick: *Etudes sur Rimbaud* (Nizet) 1960, p.118.
2) *Œuvres complètes de Rimbaud* (Pléiade) p.553.
3) *Ibid.*, pp.538～547.
4) André Dhôtel: *La vie de Rimbaud* (Edition du Sud) 1965, p.175.
5) Charles Chadwick, *op. cit.*, p.123.
6) Françoise d'Eaubonne: *Verlaine et Rimbaud* (Albin Michel) 1960, p.254.
7) *Mercure de France, 1er octobre 1954*, pp.231—232.
8) このS.E.の世界はすでに *Les Déserts de l'amour* にあらわれている．すなわち，主人公の若者が，倦怠し，心乱れて貞潔に向うかのようにひたすら死へおもむいた姿勢は，*Délires* I の «J'étais mûr pour le trépas.» に類似し，また «...cette

Ame...rencontre en cet instant-là des consolations sérieuses...》という表現は，詩的世界の頂上での詩人の体験《...je voyais se lever la croix consolatrice》(*Délires* I) につながるものである．従ってわれわれはこの散文を1872年の後半に位置づけたい，

9) Jacques Plesson: *Promenades et Poésie* (Mouton & Cie) 1967, p. 253.

10) Enid Starkie: *Arthur Rimbaud* (A New Directions Book) 1961, p.257.

11) Marc Eigeldinger: *Rimbaud et le mythe solailre* (La Baconnière) 1964, p. 15.

12) S.E. における Rimbaud の意識構造，とくに「幸福」・「不幸」・「地獄」については拙稿「ランボオの「地獄の季節」における「幸福」について」(同志社女子大学学術研究年報第19巻昭和43年11月) 参照されたい．

13) Suzanne Bernard: *Œuvres de Rimbaud*, 1960, p.482.

14) *Ibid.*, p.491.

15) Stanislas Fumet: *Rimbaud mystique contrarié* (Plon) 1966, p. 185.

16) Yves Bonnefoy: *Rimbaud par lui-même* (Ecrivains de Toujours) 1961, p.153.

17) Henri de Bouillane de Lacoste: *Rimbaud et le problème des Illuminations* (Mercure de France) 1949, p. 172.

18) Germain Nouveau: *Œuvres poétiques t.* I (Gallimard) 1953, p.226.

(昭和28年卒業（旧制）　同志社女子大学教授)